

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方

～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

I 研究テーマにかかわって

私たち人間は自分たちの便利さや利益を追求するあまり、全ての生物の生活基盤である地球の自然に対し、さまざまな環境問題を生み出している。自然が持つ自己修復性を超えて負担をかけたり、自己修復性が損なわれたりすると、回復が遅れ、結果的に人類をはじめとした生物に悪影響を及ぼすことになる。人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与えながら開発を行ってきた。その結果地球は、大気汚染、海洋汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、水質汚濁、食糧問題、人口問題、エネルギー問題、絶滅が危惧される動植物の数々等、実に多くの環境問題を抱えるようになった。また、福島第一原発事故による放射能汚染は、終わりの見えない最大の環境問題である。原発の危険性や処理の問題等があるにもかかわらず、再稼働の方向に進んでいる。このまま環境の危機を放置しておく、いずれ地球は生物の住めない星になってしまうであろう。

これらの問題を解決に導くためには、私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し、その原因を追求することが大切である。また、環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し、環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。未来の子どもたちや多くの生物たちが安心して暮らせる環境を残していくために、私たち一人ひとりが、問題解決のために何をしなくてはならないかを考え、実行していくことが必要とされている。

本部会では、まず、私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに、環境問題を自分の課題としてとらえ、主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも、子どもたちが身近な自然に親しみ、自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して、環境意識を高めるとともに豊かな感受性を育んでいきたい。

II 研究内容

1 研究授業

(1) 第5学年 理総合的な学習の時間「マイツリーをとおして自然に関心をもとう」

授業者 向山 潤 教諭 (牧丘第二小)

- 子どもたちは普段、学習で取り扱う動植物には意欲的に関わろうとする姿が見られるが、授業以外での関わりはあまり見られない。自然豊かな地域に住んでいるが、木は身近な存在となっていない。この学習で木を取り上げ、そこに生えている木がどのように生長してきたか、なぜそこにあるのかなどを投げかけ、そこから調べたいという興味・関心を引き出し、木を身近に感じられるものにしていく。

(2) 第4学年 理科「季節と生き物」・・・秋のフィールドワーク・・・(野外授業)

授業者 石原 喜久夫 教諭 (牧丘第三小)

- 身近にある自然の中に、様々な生き物が住んでいることに気づかせる。活動がにぶくなる晩秋でも、それぞれの環境に合わせた形態で命をつないでいる様子に気付かせる。数人のグループでテーマ(葉の表と裏、虫、木の幹)を決め、デジタルカメラでとったものを持ち寄り、発表し合う。

2 一人一実践

部会員一人ひとりが日々実践していることを報告し、意見交換をする。

3 学習会（実技研修）

材料を持ち寄っての苔玉づくり

4 臨地研修

小檜山（1713m）の自然観察会

Ⅲ 成果と課題

1 研究授業

8月の授業研究では、5年生の児童6人が総合的な学習で、1学期から取り組んできた「マイツリー」についてのプレ発表会をした。授業案の作成に際して、自然をより身近に感じられるようにするために、事前の研究会において多くの提案や情報交換がなされ、本授業に至った。児童一人ひとりが、校庭の桜の木や自宅の松や鬼ぐるみの木などを選び、その木にまつわるエピソードや木の観察や調査などをして学習を広げていった。プレ発表会で仲間から疑問や質問が出されたことで、本発表会に向けさらに深められたようであった。本授業をとおり、自然を身近に感じさせるように迫るための指導や支援について、学び合うことができた。

11月の野外授業では、牧三小周辺を3つのグループに分かれて散策しながら、晩秋の生き物や植物を探す活動を行った。見つけた生き物や植物の様子をデジタルカメラで撮影し、記録とした。昨年度の牧三小周辺の冬散策と比べながら、テーマに沿って撮った写真をもとに発表会をした。どのテーマにも関心をもちながら聞くことができた。研究会では、周辺の地形の特徴や、生活科の探検ポイントになっている遺跡や施設についての情報交換を行い、身近な自然環境の授業への取り入れ方について学び合うことができた。

どちらの授業も、研究テーマにかかわる体験的な活動をメインとした内容であり、自然の素晴らしさや不思議さを、体験を通して気付くことができ、自然を身近に感じることができた。体験から得た気付きは、大人になっても忘れることはなく、環境問題を考える基礎を培うことができたのではないかと思われる。

2 一人一実践

部会員一人ひとりの得意な分野を生かした実践が紹介された。低学年では、授業研究を参考に、学校周辺の写真を手がかりに探す活動が紹介された。中学年では、学校周辺の苔を見つけて育てる活動や蚕の世話による命についての学習が提案された。高学年では、縄文人の生活体験（火おこし）や環境ニュースノートを使った5年生～6年生にかけての長い取り組みが紹介された。

学年の発達段階に合ったさまざまな実践が報告され、環境教育や身近にある教材の活用の仕方について知ることができ、得た知識を日々の実践に活用することができた。

3 学習会（実技研修）

研究計画時に、「苔」について話題が出され、研究のまとめとして、後半に苔玉づくりを体験した。部員の一人が実際にやっていることを教えてもらい、それぞれが持ち寄った苗と苔を使って、実習することができた。育て方についても情報交換をし、生育を楽しみに持ち帰ることができた。

4 臨地研修

小檜山での自然観察を行った。以前は、高学年の遠足でも登っていた山で、身近な自然観察の場としてもっと活用できるのではないかという意見が出された。環境教育では、教師の知識や関心がそのまま子どもにつながっていくため、教師自身の自然体験が豊富であることが大切である。研究会での臨地研修は得るものが多く、大変有意義であった。

（部長 泉 薫）